

University Academic Repository

Did K. Marx use the word burgerlich as bourgeois?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2006-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Osawa, Satoru メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/161

マルクスは bürgerlich を bourgeois の意味で使っているか

Did K. Marx use the word bürgerlich as bourgeois?

大 澤 覚

Satoru Osawa

<要 約>

筆者は市民社会論を専門とするものではないが、担当する財政学の講義に関してこの意味が問題となってきた。これを調べた結果、ドイツ語の bürgerliche Gesellschaft が、ある時は「ブルジョア社会」、またある時は「市民社会」と訳し分けされることを知り、新たにこれについて疑問に思い、これに焦点を当てて関連する文献を調べてみた。その結果、多くの経済学者が引用・言及してきたマルクス自身が、bürgerlich と Bourgeois- を使い分けていることが分かった。そこで、本稿では、とりあえず、この訳し分けの不当さを主張する観点から、マルクスに内在して、まずマルクスがこの使い分けをしていることを示し、そのうえで、bürgerliche Gesellschaft と資本主義社会、Bürger と Bourgeois、bürgerliche Gesellschaft と Bürger の順にそれぞれの用語をどのように使用しているか、どのような含意で使用されているかなどについて追求してみた。

<キーワード>

訳し分け、使い分け、bürgerlich と Bourgeois-、市民社会 (bürgerliche Gesellschaft)、ブルジョア (Bourgeois) と市民 (Bürger)

はじめに

例えば『経済学辞典』(岩波書店、1972年)で「市民社会」と引くと、冒頭に「[英] civil society, bourgeois society [独] bürgerliche Gesellschaft [仏] société civile, société bourgeoise」と羅列されている。これをよく見ると、ドイツ語は「bürgerliche Gesellschaft」だけしかない。これは原因なのか、結果なのか、この1語で、あるときは「市民社会」、あるときは「ブルジョア社会」と訳し分けされるのである¹⁾。たとえば、日本語版『マルクス＝エンゲルス全集』で「市民社会」・「ブルジョア社会」、あるいは、広く「市民(的)～」・「ブルジョア(的)～」と訳された箇所をドイツ語(Werke)版と照合すると、訳し分けの例がかなりみつける²⁾。そこで、これを追究してみると、「市民(的)」は bürgerlich か Bürger だが、「ブルジョア(的)」は、

bürgerlich や Bürger とは限らず、Bourgeois や Bürgertum もある。つまり、「ブルジョア(的)」とあるごとに原語の確認が必要なのがわかるのである。それだけでなく、そもそもマルクス自身が、bürgerlich と Bourgeois、Bürger・Bürgertum と Bourgeois を使い分けているように思われてくるのである。

そこで、私は市民社会論を専門に研究するものではないが、担当する財政学講義の都合から市民社会についての自分の理解をつくる必要性を感じ、注目される論文に目を配ってきた³⁾。その結果わかったことは、もちろん、bürgerlich や Bürger という語の多義性とその変遷の複雑さであるが、同時に、それは、マルクスのように一定の哲学思想に基づいて社会を構成体として認識する視点が曖昧だからではないかということである。そういう経緯から、本稿では、市民社会論の概念史を取り上げようとするのではなく、上記の訳し分けは不当ではないかという観点から、bürgerliche Gesellschaft、Bourgeois、Bürger などの用語について、マルクスの著作に内在して探求してみることとする次第である。なお、本稿では、煩雑になることを避けて Bürgertum は割愛する。

1. マルクスは使い分けている

さて、『マルクス＝エンゲルス全集』の中で bürgerliche Gesellschaft が「市民社会」とも「ブルジョア社会」とも訳される例として、「経済学批判 序言」から次の2例をあげよう。(同『全集』からの引用では巻数と頁数のみ記す。また、ゴチック・アンダーライン・{ } 内は大澤のもの)

①「**市民社会**の解剖学は経済学のうちに求められなければならない。」(13巻6頁)

②「**ブルジョア社会**の体内で発展しつつある生産力は、同時にこの敵対のための物質的条件もつくりだす。」(13巻7頁)

これはたかだか2頁ほどのところの用例だが、花崎皋平訳『新版ドイツ・イデオロギー』(合同出版、1996年)を見ると、「《bürgerliche Gesellschaft》という述語は、《市民社会》をさすと同時に《ブルジョア社会》をさす」(163頁)というロシア語新版の注がついているから、市民＝ブルジョアとみるのは日本だけではないらしい⁴⁾。しかし、はたしていま、市民はブルジョアだろうか。注3の重田氏の研究にもあるように、『ドイツ・イデオロギー』以来のマルクスは使い分けていると思われるが、次の『賃労働と資本』からの引用を見たとき、市民＝ブルジョアで良いといえるだろうか。

③「われわれは次の三つの大きな部分に分けて述べよう。(一)賃労働と資本との関係、…。

(二)今日の制度のもとでは**中間市民階級**と農民身分の没落は不可避であること。(三)世界市場の専制的支配者であるイギリスによってヨーロッパ諸国の**ブルジョア階級**が商業的に隷属させられていること。」(6巻393頁)

ここに「中間市民階級」と「ブルジョア階級」の2語がでてくるが、どちらにも bürgerlich

は使用されないで、前者は Bürgerklasse で、後者は Bourgeoisklasse と表現されている。前者の Bürger は bürgerlich と、品詞は別だが、同義のドイツ語である。また、Bourgeois は、もとはフランス語で、これがドイツ語に取り入れられたものである。すると、②のように bürgerlich を「ブルジョア」と訳すと、Bourgeois と区別がつかなくなる。マルクスは両語を併用している。そこで、それを鮮明にするために、「フランスにおける内乱」⁵⁾ から、さらに 2 例を引用しよう。

- ④「常備軍、警察、官僚、聖職者、裁判官という、いたるところにゆきわたった諸機関…をもつ中央集権的な国家権力は、絶対君主時代に始まるものであって、生まれかけていた**中間階級（ブルジョア）**社会にとって、封建制度と戦うための強力な武器として役立った。」（17巻312頁）

この「中間階級（ブルジョア）社会」の原語は Bourgeoisgesellschaft である。したがって、これを「ブルジョア社会」と訳すことは正しいであろう。しかし、「中間階級（ブルジョア）社会」はどういうことだろうか。中間階級社会とブルジョア社会が同じということだろうか。そうなら、混乱ではないか。なぜなら、マルクスは「イギリスの憲法」で「ブルジョアジー—それ自体中間階級の最上層にすぎないのだが—」（11巻5頁）と述べているが、次の例でもそれははっきりしているからである。

- ⑤「皇帝制度 [imperialism]こそは生まれでようとする**中間階級社会**が封建社会からの自分自身の解放の手段としてつくりあげはじめ、成熟しきった**ブルジョア社会**がついに資本による労働の奴隷化の手段に転化した、あの国家権力のもっともけがれた形態であると同時に、その終局の形態である。」（17巻315頁）

この原語は、前者の「中間階級社会」が bürgerliche Gesellschaft、後者の「ブルジョア社会」が Bourgeoisgesellschaft である。内容をみると、前半では「自分自身の解放の手段として」bürgerliche Gesellschaft が imperialism を作り上げ始めることが述べられ、後半では Bourgeoisgesellschaft が imperialism を「資本による労働の奴隷化の手段に転化した」ことが述べられている。明らかに両語が併用されている。この内容から推測すると、前者の bürgerliche Gesellschaft は「封建社会から抜け出てきた Bürger の社会一般」であり、後者の Bourgeoisgesellschaft は「Bürger の社会の内部にあって、Bürger の一員をなす Bourgeois の社会」ではないか。つまり、「Bourgeois とは Bürger の一部」、「特殊な Bürger」ではないか。そういう目でみると、④の Bourgeoisgesellschaft も、Bürger の社会一般ではなく、常備軍、警察、官僚、聖職者、裁判官といった中央集権的な国家権力とかかわる特殊な Bürger について語られていることがわかる。

それでは、この見通しが正しいかどうか、少し角度を変えて日本訳の方から確かめる作業をしてみよう。すなわち、ブルジョア・ブルジョア（的）～と訳されたとき、その原語が Bourgeois と Bürger、Bourgeois と bürgerlich・Bürger のいずれであるかの区別が脈絡から判断できるのかどうかの確認作業をやって使い分けを検証してみよう。まず、『賃労働と資

本』の次の箇所をみよう。

- ⑥「もし私が100フランかけて商品を生産し、この商品売って110フランを得る…なら、それは普通で、まともで、適正な設けである。ところが、…200フランも得るとすれば、それは法外で莫大な儲けということになる。してみると、このブルジョアはなにを尺度に儲けをはかっているのか？彼の商品の生産費だ。」(6巻399頁)

ここでは、「普通で」にbürgerlich、「ブルジョア」にBürgerが用いられている。前者は、「Bürgerのあいだで一般の」ということだろうか。後者は、この部分だけで不足ならばこの前後も合わせて読むと、「商品交換者の対等な世界」を内容としているから、Bürgerと判断できる。

- ⑦「二月革命と三月革命をおこなった労働者階級が制圧されると同時に、彼らの敵——フランスではブルジョア共和派、ヨーロッパ大陸全体では封建的絶対主義とたたかっているブルジョア階級と農民階級——も敗北したのだということ…」(6巻392頁)

ここでは、「ブルジョア共和派」にBourgeoisrepublikan、「ブルジョア階級」にBürreklasseが充てられている。この前者では、「彼ら{労働者階級}の敵」とあるので、Bourgeoisとわかる。また、後者では「農民階級」と併記されて「封建的絶対主義とたたかっている」とあるので「Bürger」ないし「bürgerlich」とわかる。

- ⑧「だから資本家と労働者の利害は同一なのだ、とブルジョアやその経済学者は主張する。実際そうだ！労働者は、資本家が雇ってくれなければ破滅してしまう。資本は、労働力を搾取しなければ破滅するし、労働を搾取するには、資本はそれを買わなければならない。」(6巻406頁)

ここは「資本家と労働者」を対比し、その利害を論じている箇所なのでBourgeoisとわかる。したがって、そのあとにある経済学者もBourgeois的ないわば御用学者ということになるだろう。

- ⑨「生産的資本の増大と賃金の上昇とは、ブルジョア経済学者の主張するように、本当に切り離しがたく結びついているのであろうか？」(6巻412頁)

ここは、生産的資本に言及しているので、Bourgeoisかと思われるかもしれないが、経済学者は、御用学者や俗流経済学者でないかぎり、Bürgerの社会の内的関連を研究するから、bürgerlichである。

こうしてみるとわかるように、マルクスははっきりとBourgeois・Bourgeoisとbürgerlich・Bürgerを区別している。本稿はマルクスのbürgerliche Gesellschaft像の解明を企図しているわけではないが、これらの用語の正確な把握をめざして、次項以降で、マルクスに語らせることで確認をしてみたい。なお、この後のマルクスからの引用文中では、とくに支障がないかぎり、「bourgeois」が「ブルジョア」と訳されているときや「Bürger」や「bürgerlich」が「市民」と訳されているときはそのままとし、「Bürger」や「bürgerlich」が「ブルジョア」と訳されているときにのみ四角をつける。

2. bürgerliche Gesellschaft と資本主義社会

先にあげた注 3 で、重田氏は、「資本主義的な経済構造にひきつけて近代社会を把握するばあいには「資本家社会」…、経済的基礎に関わらない概括的な把握においては「市民社会」…が使われている…」とされていた。また、注 2 の『大月経済学辞典』では「ドイツ語の bürgerliche Gesellschaft という言葉は往々ブルジョア社会と訳され、資本主義社会と同義にもちいられることがある。しかし市民社会とは同じではない」とされていた。そこで、この両語の関係をみるために、まず、『賃労働と資本』から、次の箇所を引用しよう。

「生産のさいに、人間は、自然に対して関係するだけではない。彼らは、一定の仕方で共同し、その活動を相互に交換しなければ、生産できない。生産するために、彼らは互いに一定のつながりを結ぶが、こうした社会的な関係やつながりの内部ではじめて、彼らと自然との関係がおこなわれ、生産がおこなわれるのである。／…諸個人がそのなかで生産する社会的関係、すなわち社会的生産関係は、物質的生産手段、生産力が変化し発展するにつれて、変化し、変動する。全体としての生産関係は、社会的関係、社会と呼ばれるものを、しかも一定の歴史的発展段階における、独特で特色のある性格をもった社会を形づくる。古代社会、封建社会、ブルジョア社会は、そういう生産関係の全体であり、同時にそれぞれ、人類史上の特別の発展段階をあらわしている。」(6 巻 403 頁)

ここでは、つぎの 4 点がのべられている。まず (i) 生産が自然にたいする関係であること、同時に (ii) 生産が人間の相互関係であること、さらに (iii) その社会関係のなかで生産がおこなわれること、そして (iv) その総体において歴史上の社会が形成されてきていること、以上である。ここからは、マルクスが、bürgerliche Gesellschaft も生産の発展に規定されて産みだされた「人類史上の特別の発展段階」にある一社会とみていることがわかる。これについてマルクスは後に次のように述べる。

「私の研究の到達した結果は次のことだった。すなわち、法的諸関係ならびに国家諸形態は、それ自体からも、またいわゆる人間精神の一般的発展からも理解できるものではなく、むしろ物質的な諸関係に根ざしているものであってこれらの諸生活関係の総体をヘーゲルは、18 世紀のイギリス人およびフランス人の先例にならって、「市民社会」という名のもとに総括しているのであるが、しかしこの市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならない、ということであった。」(13 巻 6 頁)

この前半は、「法的諸関係ならびに国家諸形態」は「物質的な諸関係に根ざしているもの」なのだが、ヘーゲルはこの総体を bürgerliche Gesellschaft と呼び、「人間精神の一般的発展から」理解しようとしたということで、これは「ヘーゲル国法論批判」で述べられていた次の箇所と同じ内容である。

「…理念が自立的な主体に転化されている。そして、家族や市民社会の、国家への現実的な関係はそれらの内的な想像上の活動としてつかまれている。現実には、家族や市民社会は国家の前提であり、まさにそれらが本来活動するものなのであるが、思弁的な

かではこれが逆立ちさせられるのである。」(1巻236頁)

つぎに、後半はすでに引用した①の部分だが、これと同じことをエンゲルスも「カール・マルクス『経済学批判』」で述べている。

「経済学は近代ブルジョア社会の理論的分析であり、したがって発達したブルジョア的状態を前提とする…。」(13巻470頁)

いうまでもなく、ここで述べられている学問上の方向は、次の箇所と同じである。

「私がこの著作で研究しなければならないのは、資本主義生産様式と、これに照応する生産諸関係および交易諸関係である。」(『資本論』1巻12頁。訳文は新日本出版社版)

そうすると、以上のことから、次の三段論法が成り立つだろう。すなわち、「bürgerliche Gesellschaftの解剖学」が「経済学」で、「経済学者マルクス」が研究対象にしたものが「資本主義的生産様式とこれに対応する生産・交易様式」であるならば、マルクスにおける bürgerliche Gesellschaftの実態とは資本主義社会であると。実際、「経済学批判への序説」では「資本はブルジョア社会のいっさいを支配する経済力である」(13巻634頁)と述べており、また、『賃労働と資本』でも「資本もまた、1つの社会的生産関係である。それは1つのブルジョア的生産関係であり、ブルジョア社会の一生産関係である」(6巻403頁)とも述べている。

しかし、「bürgerliche Gesellschaftの実態」が「資本主義社会」であっても、捉えている側面が違えば、両語は違うということができる。そして、重田氏のいうように確かに捉えている側面は違う。先取りして言えば、マルクスの bürgerliche Gesellschaftは、重田氏のいう「経済的基礎に関わらない概括的な把握」というような曖昧なものではなく、社会を「対等・平等な成員」の視点から捉えたときに使うのである。これに該当するものとしては次の表現がある。

「…ブルジョアの富は1つの巨大な商品の集まりとして現われ、個々の商品はこの富の元素的定在として現われる。(13巻13頁)

ここの原語「bürgerlicher Reichtum」は「Der Reichtum der bürgerlichen Gesellschaft」と読み替えて差し支えないだろう。

これに対して、「資本主義社会」という場合は、重田氏は「資本主義的な経済構造にひきつけて近代社会を把握する場合」のことだとされるが、より正確には、「経済制度、体制、生産様式」の方から社会をとらえている。これに該当するのが次の例である。

「資本主義的生産様式が支配している諸社会の富は、「商品の巨大な集まり」として現われ、個々の商品はその富の要素形態として現われる。」(『資本論』1巻49頁)

ここの「資本主義的生産様式が支配している諸社会の富」とは「資本主義社会の富」と読みかえてよいであろう。したがって、bürgerliche Gesellschaftと資本主義社会は、捕え方は別であるが、対象・実態は同じものである⁶⁾。

ちなみに、周知のように、マルクスは古典派経済学を「科学的経済学」と評したことが

ある⁷⁾。同時に、古典派経済学は批判の対象であった。それでは、古典派経済学の崩壊後に bürgerliche Gesellschaft が存在するとして、その内的連関の科学的解明に取り組んだのは誰か。ポール・スウィージーは「社会主義者の経済学は資本主義の経済学であり…」(都留重人『近代経済学の群像』、日経新書、昭和49年、23頁)と語ったが、マルクスの経済学がそれならば、『資本論』こそは「bürgerliche Gesellschaft の書」⁸⁾ということになる。それは、マルクスが、「経済学がブルジョア的である限り、すなわち、資本主義的秩序を社会的生産の歴史的に一時的な発展段階ととらえないで、反対に、社会的生産の絶対的で究極的な姿態と捉える限り、経済学が科学でありうるのは、ただ、階級闘争がまだ潜在的であるか、またはただ個別的現象として現われているにすぎない間だけのことである」と『資本論』の「あと書き」(18頁)で述べて、副題に「経済学批判」と書いたことから不当ではない。「近代ブルジョア社会、つまりわれわれの社会」(「ライン民主党地区委員会にたいする訴訟」6巻244頁)の科学的解明がなされたのだから。

3. Bürger と Bourgeois

先にマルクスが Bürger と Bourgeois を区別していることを述べた。ここで改めて検討してみよう。まず、Bürger についてである。

先にあげた⑥をふりかえると、「このブルジョア {Bürger} はなにを尺度に儲けをはかっているのか？」と訳されていた。この箇所は、「商品の価格はなにによって決められるか？ 買い手と売り手の競争によって、需要と供給、提供と欲求の関係によって」(6巻397-8頁)という書き出しで始まる部分の一節だった。無数の商品が価値の実現をはかる交換の場面において、各商品は「個として対等」で、かつその商品世界の「成員」として登場する。このことは、『資本論』において、次のように表現されている。

「ある1つの商品、たとえばリンネルの価値は、いまや商品世界の無数のほかの要素で表現されている。他の商品体はどれもリンネル価値の鏡となる。……。だから、いまやリンネルはその価値形態によって、もはや単に個々の他の商品種類にたいしてだけでなく、商品世界にたいして社会的関係に立っている。商品としては、リンネルはこの商品世界の一市民 {Bürger} である。」(1巻77頁)

ここには Bürger の捉え方がよく示されている。通常、ドイツ語の辞典を引くと、「Bürger = Angehörige einer Gemeinde oder Staats {共同体や国家の一員・成員}」などと出てくるが、これで見ると、マルクスの用法はこの説明と同内容である。実際、かつて東ドイツ(DDR)で『Grundrechte des Bürgers (ヴェルガーの基本的権利)』という法律書が1980年に「Staatsverlag der DDR」社から出版されている。これをブルジョアと訳すと、一階級の Bourgeois に特別な権利を認めるということになり、資本主義社会でも奇妙だが、社会主義を標榜した国ではいっそう奇妙である。これには、フランス語版『資本論』巻頭のラシ

ャートルへの呼びかけに citizen が用いられ、これがドイツ語版『資本論』（1巻31頁）で「Bürger」と訳されているということを付け加えてもよいだろう。

それでは、マルクスは Bourgeois をどう用いているだろうか。先に引用した⑧には、「資本家と労働者の利害は同一なのだ、とブルジョアやその経済学者は主張する」とあった。これは、労使の利害が一致するという金持ちやその立場の経済学者という脈絡である。マルクスが Bourgeois という場合、階級や資本などに関わる内容を伴っている。次の例もそのことをよく示している。

「資本ができるだけ急速に増大することは、労働者階級にとってもっとも有利な状態であるが、その場合でさえ、労働者の物質的生活状態がどれほど改善されようとも、労働者の利益と、ブルジョアの利益との対立がなくなることはない。」（6巻411頁）

ここでは、「資本の増大」と「労働者階級」、「労働者の利益」と「ブルジョアの利益」の対立が述べられている。さらに、次の例は「資本の人格」である「資本家」を意識して述べられている。

「資本主義社会の矛盾に満ちた運動は、実際のブルジョアには、近代産業が通過する周期的循環の浮沈においてもっとも痛切に感じられるのであって、この浮沈の頂点が一般的恐慌である。」（『資本論』1巻28頁）

したがって、次のような断片的な引用でも Bürger でないことは判断できる。

「これは、ブルジョアが労働者に与える慰めというよりは、むしろ自分自身に与える慰めである。」（6巻417頁）

いま、Bürger と同語源の Bourgeois が、ドイツ語に取り入れられた経緯を説明する力はないが、一般的には資本主義発展の相違が背景にあると考えられる。これは日本も同様だが、後進国ロシアではより明瞭で、オジェゴフの『ロシア語辞典』では、「Буржуа=Лицо, принадлежащее к классу буржуазии {ブルジョア=ブルジョア階級に属する人}、Буржуазия=Господствующий класс капиталистического общества, … {ブルジョアジー=資本主義社会の支配階級}」とあり、ここには Bürger や bürgerlich の訳語や説明にでてくる「中産階級」という表現はない。成熟したブルジョア、支配階級に成長したブルジョアの謂いになっている。マルクスが Bourgeoisie という場合、たとえば、「16世紀に資本の増大、ブルジョアジーの台頭をうながした」（6巻408頁）や「資本家階級すなわちブルジョアジー」（6巻411頁）、さらに「ブルジョアジーは封建諸侯と同じような偏見をもつには、頭もひらけすぎているし…」（6巻412頁）というように、封建諸侯や労働者階級に対して「階級としての Bourgeois」「資本の人格としての Bourgeois」を表現している。そもそも「ブルジョア」とはこういうことではなかったか。

以上によって Bürger と Bourgeois の区別もはっきりしたと思われる。その意味では「市民革命」、「ブルジョア革命」という用語も要注意で、「ブルジョア」が中心とはいえない近代化の革命・変革をも「ブルジョア革命」ということは再考の必要があるだろう^{9),10)}。

4. bürgerliche Gesellschaft と Bürger

つぎに、bürgerliche Gesellschaft と Bürger の関係を見ることにし、まず、bürgerliche Gesellschaft の歴史的位罫について言及している 2 例をあげよう。

- ①「大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期として表示されうる。ブルジョア的生産関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。…ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対の解決のための物質的条件もつくりだす。したがって、この社会構成をもって人間社会の前史は終わる。」(13 卷 7 頁)
- ②「私はブルジョア経済の体制を…資本・土地所有・賃労働、国家・外国貿易・世界市場という順序で考察する。はじめの三項目では、私は近代ブルジョア社会が別れている三つの大きな階級の経済的諸生活を研究する。」(13 卷 5 頁)

この 2 つの引用は、いわゆる「マルクスのプラン」が述べられた部分である。このうち、①では、「経済的 social 構成のあいつぐ諸時期として」「アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的生産様式」を挙げ、ここでは「近代」をつけていること、また、「ブルジョア的生産関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である」と述べていること、さらに②では、「ブルジョア経済の体制」と「近代」をつけずに用いていること、これらのことから、マルクスが bürgerliche Gesellschaft という場合、一般的に用いる場合と、とくに最近を強調して「近代」という場合があるが、その実態は、いずれも「資本主義社会」である。次の 3 つはこれを補足するものである。

- ③「大工業と自由競争との社会、すなわち近代ブルジョア社会」(13 卷 45 頁)
- ④「ブルジョア社会は、もっとも発展したもっとも多様な歴史的な生産組織である。」(13 卷 632 頁)
- ⑤「ブルジョア社会の最近の諸形態の一つである株式会社」(13 卷 635 頁)

ところで、さきに bourgeois は「Bürger の一部」と述べたが、「マルクスのプラン」の中ではっきりと書かれているように、bürgerliche Gesellschaft はその内部に対立関係を孕んでいる。資本も土地所有も賃労働も含まれている。Bourgeoisie は、労働者階級・プロレタリアートと並んでこの社会の構成員になっている。いわば要素として対抗しながら存在している。だから、その一部にすぎない Bourgeois を想起させる「ブルジョア社会」という訳は、厳密ではないことになる。

それでは、マルクスは bürgerliche Gesellschaft とはどういう社会で、Bürger はどういうものだと説明しているだろうか。それには、先の『資本論』1 卷 77 頁がまず重要だが、他に、つぎのものがある。

「16 世紀以来準備されて 18 世紀に成熟への巨歩を進めたブルジョア社会…この自由競争社会では、個人は、それ以前の歴史上の時代には彼を一定の局限した人間集団の付属物にしていた自然的紐帯などから解放されて現われる。／…18 世紀にブルジョア社会

ではじめて、社会的関連の種々の形態が、個人にたいして、その個人的な目的のためのたんなる手段として外的な必然性として、相対するようになる。しかし、このような立場、すなわちばらばらな個人の立場を生み出す時代こそは、まさに、これまでのうちでもっとも発展した社会的な（この立場からみれば一般的な）諸関係の時代なのである。人間はもっとも文字通りの意味でゾーン・ポリティコン〔共同体的動物、社会的動物〕である。…ただ社会のなかだけで個別化されることのできる動物である。」（『経済学批判 序言』13巻611-2頁）

ここでは、次の3つのことが述べられている。まず、① *bürgerliche Gesellschaft* が16世紀から18世紀にかけて成熟した自由競争社会であること、②そこでは、人間が自然的紐帯などから解放され、個人として現われること、さらに、③社会的関連の種々の形態が個人ののためのたんなる手段になること、などである。すなわち、社会発展の結果、社会の中にあって一個の自立した存在となった人間、これが「個人」で、歴史的にはまず「Burgの人」＝*Bürger* である。言い換えると、「*Bürger*といわれる人間にまで分化された社会」、これが「*Bürger*の*Gesellschaft*」すなわち *bürgerliche Gesellschaft* である。

ちなみに、マルクスも述べているように、個人は要素という意味で「社会の成員」であるが、個人が主体となって社会を作り出すのではない。社会が先で個人は後といってもよい。例えば、前掲『広辞苑』の「市民社会」の説明でいえば、「…自由平等な個人によって構成される近代社会」でも意味はわかるが、それは「社会契約説」的ないしは、一度個人にまで分解した後に再構成するという点では「有機体説」的説明というべきで、正確でない。たとえば、人体は臓器や手足などからなるというのは正しいが、いくら臓器や手足を集めても人体（有機体）にはならない。生命体の発生系統で起こった細胞の機能分化と同様、社会において個人は分化して社会に存在する。生命体で脳や心臓などの諸器官が有機的に結合しているように、社会においては、各人が諸階級・諸階層に分化しながら、あたかも対等・平等な成員として有機的に連繋している。しかし、胃の細胞が、細胞一般としてではなく、胃という特殊な機能を果たす細胞群として存在し、それによって存在意義を認識されるように、個人も、人間一般としてではなく、労働者は「労働する個人」として、資本家は「資本を所有する個人」として現われることにより、つまり、社会の中で一定の地位を占めることによって人間と認識される。逆に、失業でもすれば、あるいは高齢化して労働不能となれば、その人は社会的には無とされ、人間扱いされない事態ともなる。人間が人間と認められるより先に、社会における地位や役割が必要になる。社会で何らかの機能を果たす人として二重性をもって存在している。そして、社会全体としても、胃の細胞が胃として形成されるように、労働者の子供は労働者になる人として、資産家の子供はそれを引き継ぐ人として再生産される。違うのは、生命体では胃は胃のまま？だが、社会では条件の変化で構成や立場が変わることがあるということである。ともかく、「個人は主観的には諸関係をどんなに超越しようとも、社会的には依然として諸関係の被造物なのである。」（『資本論』1巻16頁）

以上で、マルクスが bürgerlich と Bourgeois、Bürger と Bourgeois を使い分けていることがわかるとおもわれる。

まとめにかえて－ bürgerliche Gesellschaft と société civile －

bürgerliche Gesellschaft をめぐる議論のなかに、フランス語の société civile に注目して、これに特別な意味を見出そうとする論者がある¹¹⁾。そこで、これについて言及してまとめをしたい。

まず、語義をみておこう。civil は、ラルースの『フランス語辞典』によれば、「Qui concerne les citoyens (par opposition à militaire et à ecclésiastique) : {(軍人や聖職者にたいして) 市民にかんする}」、また、「市民 = citoyen」は「Personne qui jouissait du droit de cité. Membre d'un État. : {都市の権利を享受する人。国家の一員。}」とある。これを見るかぎりでは、ドイツ語の bürgerlich と同じであり、したがって bürgerliche Gesellschaft と société civile は同じである。マルクスがこの両者に区別をつけたとは思えないが、問題とされるものが 2 つある。その 1 つは、フランス語で書かれた「アンネンコフへの手紙」である。

「もし人間の生産諸力の一定の発展状態を前提するならば、そこにはまたそのような交易〔交通〕と消費との形態があるでしょう。もし生産、交易、消費の一定の発展度を前提するならば、そこにまたそのような社会的構成の一定の形態、そのような家族や身分や諸階級の組織、一言でいえばそのような市民社会 {société civile} があるでしょう。このような市民社会を前提するならば、そこには市民社会の公的表現にほかならない政治的状态があるでしょう。」(4 巻 563 頁)

ここに、3 箇所「société civile」が出て来るが、これが bürgerliche Gesellschaft とは違う意味をもっているという。どうしてそういえるのかわからないが、ここでは、「生産力を前提すれば、それに対応する生産・交易・消費が考えられ、さらにそれに対応する市民社会ができ、その市民社会をもとに国家ができあがる」と述べられている。そうすると、これは、規定・被規定の関係を述べた「経済学批判 序言」の中の次の部分と同じとみてよいはずである。

「人間は…彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係に入る。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に、一つの法律のおよび政治的上部構造がそびえ立ち、…。」(13 巻 6 頁)

ちなみに、Werke 版では、先の 3 箇所を、順に「eine entsprechende Gesellschaft [société civile] {それに対応する社会 [市民社会]}」、「eine solche Gesellschaft {そのような社会}」、「eine entsprechende politische Ordnung [état politique] {それに対応する政治制度 [政治国家]}」と訳し、société civile を bürgerliche Gesellschaft と訳していない。

果たして、これはマルクスが意図した訳だろうか。なぜなら、先の「手紙」のなかで、「こ

のような市民社会を前提するならば、…そこにはこの市民社会の公的表現にほかならない一定の政治的状態がある」と述べていたが、これは、『ドイツ・イデオロギー』の中の「国家という形態において…一つの時代の全市民社会は…まとまる」(3巻58頁)という表現と同じなので、マルクスの *société civile* は *bürgerliche Gesellschaft* と同じでなければならない。そうすると、ドイツ語訳は間違っていることになるのだろうか。そこで、マルクスの用法が問題になるが、『ドイツ・イデオロギー』に、「市民社会という言葉は、18世紀に…現われた。その市民社会は、ブルジョアジーとともに始めて発展する」(3巻32頁)という一節がある。これからいえることは、*bürgerliche Gesellschaft* の実態はすでに存在したが、これを表現する言葉は18世紀に現われたということ、その *bürgerliche Gesellschaft* はブルジョアジーとともに発展するということである。ここで、もう1つの箇所を挙げよう。フランス語で書かれた『哲学の貧困』の中の次の箇所である。

「ブルジョアジーが勝利を占めるやいなや、…封建制度のもとでブルジョアジーによって発展させられていた生産諸力は、彼らブルジョアジーの掌握するところとなった。すべての古い経済形態、それに照応していた市民間の諸関係、旧市民社会の公的表現であった政治状態が、打破された。」(4巻140頁)

この箇所の「市民間の諸関係」に「*relations civiles*」、市民社会」に「*l'ancienne société civile*」が充てられている。しかも、「古い経済形態、それに照応していた市民間の諸関係、旧市民社会」とあるように、これは、「近代社会」・「資本主義社会」のことではなく、「封建社会」のことである。マルクスは、ここではっきりと「古い経済形態に照応する～」とか、「旧～」といって、封建社会にたいしても「市民社会」という表現をしている。これなども、いかえて「社会」といっても意味は通じるところである。

先の「アンネンコフへの手紙」の *société civile* に戻ると、「社会的構成の一定の形態、そのような家族や諸身分や諸階級の組織、一言でいえばそのような市民社会」と表現していた。これは、*bürgerliche Gesellschaft* を家族や諸身分や諸階級といった *Bürger* の *Gesellschaft* と見ていること、その *Bürger* は、文字通りの「市民」というだけでなく、むしろ「成員・構成員」というべきもので、「成員からなる社会」、「成員にまで分化された社会」とみている。これは「社会の内的構成・編成」に注目し、「社会」をその「経済構造に規定された構成」においてみているものである。そして、その「成員」の在り方は、生産力の発展とそれに対応する生産関係の変化に応じて変化するものであるから、いわば歴史継起的とも言い得るが、例えば、過去の時代にも「人間」はいたが、「人間」といえばまず「現代人」を指すとか、あるいは、歴史上にも「財政現象」はあったが、財政といえばまず「現代財政」を指すとするのが普通だとすれば、*bürgerliche Gesellschaft* についてもそういえるし、マルクスが *bürgerliche Gesellschaft* に「近代」をつけて用いる例なども肯ける。次の一節は正にそれを物語っている。

「ブルジョア社会は、最も発達した最も多様な歴史的な生産組織である。それゆえ、

ブルジョア社会の諸関係を表現する諸範疇は、またブルジョア社会の編成の理解は同時に、すべての滅亡した社会形態の編成と生産関係との認識を可能にするのである。ブルジョア社会はこれらの社会形態の破片や要素で築かれてきたのであり、これらの要素のうちまだ一部克服されていない遺物がブルジョア社会のなかでまだ余命を保っていたり、たんに暗示されていただけのものが完成された意義をもつまでに発展していたりするのである。人間解剖はサル解剖のための一つのかぎである。」（『経済学批判への序説』、13巻632頁）

つまり、*bürgerliche Gesellschaft* といえば、まず「資本主義社会」を考えるのが語法である。マルクスは、「資本主義社会をさす場合」と「歴史貫通的に用いる場合」の2通りに *bürgerliche Gesellschaft* を用いる場合があるが、それは、完成された *bürgerliche Gesellschaft* を前提にして初めて可能になる。マルクスはすでに『ドイツ・イデオロギー』（3巻32頁）のいわゆる「歴史のかまど」論のところでこれを述べている。

しかし、注意しなければならないことは、マルクスが、*Bourgeois* はドイツ語に取り入れて、*Bürger* や *bürgerlich* と同時に使用しているが、*société civile* はドイツ語にとりいれていないことである。フランス語の手紙や論文に、*bürgerliche Gesellschaft* ではなくて *société civile* が用いられても、それは当然のことで、それで何か特別の意味をもつとはいえない¹²⁾。

なお、*bürgerlich* に関しては、フランス語版『資本論』もある。しかし、ここでは、この中のほとんどすべての *bürgerlich* が *bourgeois* と訳されていることを指摘するにとどめ、この検討は割愛する。

最後に、この社会を *bürgerliche Gesellschaft* とみるか、*Bourgeoisgesellschaft* とみるかで、接近の仕方に大きな相違ができる。この社会は、実質的に不平等な、有産者が支配する社会の面と、形式的には平等な、個人にまで分化された社会の面との両面をもっている。したがって、階級関係や利害対立関係に力点をおいてみるか、成員や経済的構成関係に力点をおいてみるかによって表現は違ってくるはずである。この両面を切り離すことはできないし、どちらかの用語で両方を賄えるというものでもない。この区別がないままに「ブルジョア社会」などといえば、当人の意図とは別な理解がなされるという結果ともなりかねない。

「ジキルとハイド」ではないが、人間が2面をもつということは矛盾である。が、この矛盾は、歴史的に変化・発展する人間が必然的にとる形態である。したがって、成員がこの問題を問い直したときにやがて解決するはずであるが、マルクスがこの両語を使い分けたということは、すでにそれを展望していたということであろう。

注

- 1) Werke 版の「アンネンコフへの手紙」（4巻554頁）で、*la société bourgeoise* を *bürgerliche Gesellschaft* と訳している箇所がある。同じ段落の都合4箇所では *bourgeois* が用いられ、すべて *bürgerlich* と訳されている。ところが、すぐあとの段落では、3箇所、名詞の *bourgeois* が、*Bürger*

ではなく、Bourgeois と訳されている。そういう点では、ドイツ語版『全集』の検討も必要である。

- 2) 『全集』の他にも、例えば『大月経済学辞典』(大月書店、1979年)の「市民社会」の項を見ると、その「第5」には次のように書かれている。

「ドイツ語の *bürgerliche Gesellschaft* という言葉は往々ブルジョア社会と訳され、資本主義社会と同義に用いられることがある。しかし市民社会とは同じではない。／市民社会は、産業革命により資本主義社会が階級社会として確立する以前の新興市民階級の支配する社会を意味すると同時に、資本主義社会の基底にある商品生産関係をさす。この関係を基礎として自由・平等・友愛の市民社会の原理がなりたつ。」

この説明は正しいだろうか。

まず、「市民社会と資本主義社会が同じでない」と述べられている。かつて、『社会科学辞典』(新日本出版社、1969年)は、「資本家階級(市民階級)が、支配を確立している社会のこと。資本主義社会と同じ」としていた。「違う」というにしても、「同じ」というにしても、どのような意味であろうか。

つぎに、「資本主義社会が階級社会として確立する以前」を「市民社会」というというなら、確立後は「市民社会」といわないのかどうか。たとえば、『新潮国語辞典』(新潮社、1965年)では、「自由経済に基づき、市民の諸種の自由が保障される社会形態。近代国家の基礎をなす社会構造であり、特に都市住民だけに限られない」と説明し、「自由経済」、「近代国家の基礎をなす」と、明らかに「確立後」のことをいっている。そして、『広辞苑 第3版』(岩波書店、1983年)は、「(civil society) 特権や身分的支配・隷属関係を廃し、自由平等な個人によって構成される近代社会」と説明している。

最後に、「資本主義社会…が…確立する以前」のことだと先に述べているのに「資本主義社会の基底にある商品生産関係をさす」とはどういうことだろうか。はなはだわかりにくい状況にあるといわなければならない。

- 3) 市民社会論の文献は多いが、本稿との関連で3点の業績に言及しておきたい。

①まず、小松善雄「現代社会＝歴史理論における市民社会概念の考察－戦後日本の市民社会論史によせて－」(東京農業大学産業経営学部『オホーツク産業経営論集』第8巻第1号1997年12月)と、これに対する吉田傑俊「マルクスの市民社会論－その思想的立場と理論構造－」(法政大学社会学部『社会労働研究』第45巻2号、1998年)および『国家と市民社会の哲学』(青木書店、2000年)である。

小松氏は、マルクスがドイツ語の *bürgerliche Gesellschaft* を「土台」の意味で用い、フランス語の *société civile* を「上部構造としての市民社会」の意味に用い、その上に「国家」ができるとしている。つまり、ドイツ語の *bürgerliche Gesellschaft* (=土台)－フランス語の *société civile* (=上部構造)－国家という3層になっているというのがマルクスの説であるという。この3層説を吉田氏も認めているようである。これについては、本稿の「まとめ」で言及した。

②つぎに重田澄男『資本主義の発見』(御茶の水書房、1992年)である。

重田氏の研究のうち、本稿に関連する点に言及をしておきたい。(なお、重田氏は Bourgeois と区別して、Bürger・bürgerlich の訳語の「市民」・「市民的」に「ヴェルガー」・「ヴェルガーリヒ」のルビつけている。これに私も賛成だが、引用では一部の原語とともに省略した。)

まず、『ドイツ・イデオロギー』で、「市民」、「市民的」と…ならんで…「ブルジョア」「ブルジョア的」…が使われるようになっ {た} (112頁)、さらに、「アンネンコフへの手紙」と『哲学の貧困』のなかでは、「市民社会」と「ブルジョア社会」と…が使われている(194頁)と指摘され、「市民社会」…は、…近代的形態に限定しないで社会にとっての土台としての経済的諸関係という意味…、{「ブルジョア社会」は} 近代社会についての特有の歴史的形態規定性をもつカテゴリーとして使われている…(195頁)と指摘されている。そこで、マルクスの使い分けをいうのかと思いきや、「…「道徳的批判と批判的道徳」において、マルクスは、…「アンネンコフへ

の手紙」と『哲学の貧困』で使われた…「ブルジョア生産諸関係」を…うけついで「市民的生産諸関係」…という表現を使うようになっている」から、この「…「市民的」…は、…「ブルジョア的」と同じものである」(200頁)という。さらに、この「…「ブルジョア」…は、「道徳的批判と批判的道徳」において…、…そのまま「市民的」におきかえられたのではないようである」(203頁)ともいう。その例として、「…「市民」と「ブルジョア」…、「市民階級」と「ブルジョア階級」「ブルジョアジー」の使いわけ」(203頁)をあげ、「封建制との関係においては「市民」が、そして、近代社会におけるあり方としては「ブルジョア」が使われている」(203頁)という。そうならば、この両者は違うはずだが、それ以上の探求はない。

つづけて『『共産党宣言』においては、「市民的」とならんで「ブルジョア的」という表現が、「道徳的批判と批判的道徳」においてよりひろく使われ…ている。{たとえば、「ブルジョア階級」以外に「ブルジョア国家」「ブルジョア思想家」など} /…この…広範な使用は、エンゲルスの「共産主義の原理」においてもみられる…。/これらのことは、この時点のマルクスやエンゲルスにおいて、…ブルジョア的な…ものの表現において、「市民的」と区別した「ブルジョア的」…への傾斜がつよまっていることをしめしている。/だが、『共産党宣言』におけるマルクスは、生産諸関係…等…は、一貫して「市民的」…をもちいている…。/… {これは} …『哲学の貧困』と同義の階級的規定的内容をもつ…」(218-9頁)。すなわち、「…マルクスが使っている…「市民的」は、…諸階級がとりむすぶ「生産関係」…のとする特有のあり方をしめすもの {で、それが} 「市民社会」にも適用され…、…たんなる「市民」からなる社会という意味ではなくて、…ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級対立を基軸とする…社会のあり方をしめすものとして使われ…ている」(221-2頁)という。

結局、結論は次のようになる。『『資本論』においても、社会については、「資本家社会」…は、「市民社会」…に…とって代るものとはなっていない。…/そこでは、資本主義的な経済構造にひきつけて近代社会を把握するばあいには「資本家社会」…、経済的基礎に関わらない概括的な把握においては「市民社会」…が使われている…。」(290-1頁)

③最後に、小原耕一「グラムシと欧米における「市民社会」論の受容」(『葦牙』、2001年7月、No.27)及びこれに引用されているJan Rehmann「“Abolition of Civil Society? Remarks on a Widespread Misunderstanding in the Interpretation of “Civil Society”」(Socialism and Democracy Vol.13, No.2 Fall-Winter 1999)である。ここでは、小原氏が要領よくまとめられているので、それを活用させていただく。なお、この資料は小原氏より提供をうけたものである。

「英語でもフランス語でも、市民社会は civil society, société civile, であり、ブルジョア社会は bourgeois society, société bourgeoise, であって、その語義ははっきり区別されて使われてきた。ところが…ドイツ語の Bürger, bürgerlich にはもともとこの区別がなく、…渾然一体となって同居している。…だから、ドイツ語で bürgerlich という場合、ブルジョア bourgeois が市民 citizen, citoyen の背後に隠れて意味上の曖昧さをつくりだす一方で、bürgerlich を市民的 civil, civile と機械的に翻訳すると bürgerlich の曖昧性、両義性がかき消される結果にもなる。」(113頁上段)

いったいこれはいつの時代のことだろうか。ブロックハウスの『ドイツ語辞典』では、次のように説明している。

「Bürger = <seit der Französischen Revolution> Bewohner einer Gemeinde od. eines Staates {ビュルガー = <フランス革命以来> 共同体や国家の住民}」

「bürgerlich = 1. den Staatsbürger betreffend, ihm zustehend. 2. das Bürgertum betreffend, ihm zugehörig, entsprechend. 3. (im Marxismus) von dem Bestreben geleitet, die Klassengesellschaft des Kapitalismus zu verewigen u. Emanzipation der Arbeiterklasse zu verhindern {ビュルガーリヒ = 1. 国 {家公} 民に関する、その立場にある。2. ビュルガー総体に関する、それに属する、それ

に対応する。3. (マルクス主義で) 資本主義階級社会の永続や、労働者階級解放の阻止に導く。}」

「Bourgeois = 1.(ursp.)Angehörige der besitzenden Schicht. 2.(heute meist abwertend) wohlhabender, übersättigter, selbstgefälliger Bürger. 3 (im Marxismus) Angehöriger der Bourgeoisie (Ggs.Proletarier). {ブルジョア = 1. (もと) 有産者層の一員。2. (今日は往々蔑んで) 裕福な、飽食した、自己満足したビュルガー。3. (マルクス主義で) ブルジョアジーの一員 (プロレタリアの対語)}」

これによれば、レーマン氏のいう「渾然一体」とは違い、Bürger や bürgerlich が Bourgeois の意味をもっていない。だから、マルクスたちが Bürger や bürgerlich で表わせない意味内容をもつ Bourgeois を取り入れたのではないか。

なお、以上のほかに、著書では『市民社会の概念史』(マンフレート・リーデル、川上倫逸他訳、1990年、以文社)、個人論文では松本彰「ドイツ「市民社会」の理念と現実—Bürger 概念の再検討—」(岩波『思想』1981年5月、No.683号)などがとくに役立った。

- 4) 『詳説 世界史』(山川出版社、1987年)では、「市民=ブルジョア」と教育している。

「重商主義は商工業の発展に都合がよかったから、市民階級(ブルジョアジー)は王権を支持し、絶対主義の政治を受け入れた。しかし、市民階級がさらに成長すると、彼らはさらに政治への参加を求めて君主の権力と対立し、市民革命をおこした。」(172頁)

確かに、イギリスの近代化の革命は有産者層が中心となったが、有産者層だけで市民革命が達成されたわけではあるまい。実態に即した正確な命名が必要ではないか。

ほかにも、近代社会では個人は原理的にブルジョアであるという説明もある。

「近代社会では、個人が経済活動の手段を(収入手段)をもち、そこから個人は収入をえ、さらに財産の私有権をもつことになる。国民各人は、原理的にはあくまで有産者であり、ブルジョアなのである。」(大川政三他編『新財政論』、有斐閣、昭和61年、2頁)

- 5) この「内乱」の原語は「Bürgerkrieg」である。「内乱」は、「国内の騒乱、とくに政府と叛徒との武力による闘争」(『岩波国語辞典』)、「①内部の乱れ。国内の乱れ。②政府を転覆し、または、一地方の独立を企て、その他、国の制度を乱すことを目的として起こす暴動」(『新潮国語辞典』)などと説明されているが、マルクスがこの事件を「騒乱・乱れ・暴動」と見たり、Bürger を「叛徒」と見ていただろうか。Bürger のうちのどういう人とどういう人が対立していたのか。
- 6) 重田氏は『資本主義の発見』で、マルクスが「リカードは、市民的生産を、もっと明確には資本家的生産を、生産の絶対的な形態として把握している」(『剰余価値学説史』、26巻62頁)と述べた箇所に関連して、「資本家的」という用語は「市民的」という言葉のより正確な表現である(284頁)、「資本家的生産様式」は、「市民的生産様式」と異なる事物や自体をあらわす用語…ではなく、…よりふさわしい表現をあたえた…もの(305頁)としている。「より正確」・「よりふさわしい」とはどういう意味か不明だが、これは「市民的生産の実態は資本家的生産だ」といったにすぎない。
- 7) マルクスは次のように述べている。

「…わたしが古典派経済学というのは、①ブルジョア的^{ブルジョア的}生産諸関係の内的連関を探究する W・ペティ以来のすべての経済学を指し、これに対して俗流経済学 {Vulgärökonomie} というのは、②外見上の連関のなかだけをうろつき回り、いわばもっとも粗雑な現象のもっともらしい解説と、③ブルジョア的自家需要とのために、科学的経済学によってとうの昔に与えられた材料を絶えずあらためて反芻し、④それ以外には、自分たち自身の最善の世界についてのブルジョア的^{ブルジョア的}生産当事者たちの平凡でひとりよがりの諸概念を体系づけ、学問めかし、永遠の真理だと宣言するだけにとどまる経済学をさしている。」(『資本論』1巻95頁、丸数字は大澤)

ここで、「vulgär-」をシンチンゲルの『現代独和辞典』(三修社)で引くと、「げびた、下品な、野卑な」と出てくる。②~④でも良い評価ではない。これに対して、「古典派経済学」は、①と③で「内的連関を探究する」、「科学的経済学」と評価されている。そこで、これを前提に「bürgerliche Ökonomie」

について検討すると、次のことがいえる。まず、これは「die Ökonomie der bürgerlichen Gesellschaft」と言い直せる。これが「bürgerliche Gesellschaftの内的連関の解明を課題とする経済学」で、これをマルクスが「科学的経済学」といっているとする、これは、これまで批判的に「俗流経済学」とほぼ同義に用いられてきた「ブルジョア経済学」とは異なるものであることになる。つまり、「bürgerliche Ökonomie」を「ブルジョア経済学」と訳すと、それはマルクスの意に反することになる。むしろ、マルクスが Bürger や bürgerlich と語呂合わせして批判的に vulgär を使用していて、「俗流」よりももっと軽蔑やさげすみを込めて「下劣な経済学」と表現しているようにさえみえる。

- 8) 「科学的社会主義」という用語がある。これは、サン・シモン、フーリエらの社会主義運動が、人間的だが、ユートピア的なあまり失敗したのに対して、社会主義社会への発展の科学的根拠を解明したものとして、自らの理論や運動をこう呼んだわけである。その意味では、この呼称はすでに歴史的役割は終わっている。なぜなら、これは「社会主義の到来」を理論的に論証したと主張するもので、「実態としての社会主義」を研究したものではないからである。それゆえ、たとえば『資本論』は、「科学的社会主義の書」ではなく、むしろ「科学的資本主義(論)の書」というべきである。

- 9) 『フランスの内乱』には、次の表現がある。

「コミューンは、二つの最大の支出源—常備軍と官吏制度—を破壊することによって、すべてのブルジョア革命 {Bourgeoisrevolution} の合言葉、安上りの政府を実現した。」(17 巻 318 頁。訳文を一部修正した)

一方、『共産党宣言』には、次の表現がある。

「共産主義者はドイツにそのおもな注意を向ける。それはドイツがブルジョア革命 {bürgerliche Revolution} の前夜にあるからである。」(4 巻 507 頁)

さらに、『資本論』の中で、フランス革命を次のように表現している。

「その実施が国民的規模で試みられるのは、それからやっと 1 世紀後、フランスのブルジョア革命のなかにおいてのことであった。」(『資本論』1 巻 152 頁)

ところが、Hans Jörg 編「Sachregister Marx/Engels Werke」(Pahl-Rugenstein Verlag 刊、1983 年)の「Revolution」の項の中には、「Revolution, bürgerliche」はあるが、「Revolution, Bourgeois」はない。

- 10) 前掲の『社会科学辞典』には、次のように書かれていた。

①「ブルジョア革命」=「封建制の残存物を一掃し、資本主義の発展を保障する革命。いいかえれば、資本主義的な社会・経済体制のわくをこえない革命のことである。略。

②「ブルジョア民主主義革命」=「革命のめざす政治的内容が、民主主義の獲得・確立にあることを意味しているが、革命の社会・経済的内容はブルジョア革命と同じである。」

この「ブルジョア」のドイツ語訳は bourgeois と bürgerlich のいずれだろうか。これは、明治維新の性格規定にも影響する。

- 11)、12) 前掲、小松論文 (92 頁右) では、次のように述べている。

「マルクスは『哲学の貧困』以降においても、自己の思想・理論を主としてドイツ語で表現したところからシビル・ソシエテ=市民社会という用語を使っていない…」

そうすると、マルクスが『哲学の貧困』などで「société civile」を用いたのは、フランス語の論文だからにすぎないと考えざるを得ない。